やっと発見した輪郭つき東京大学創設の布達　（国立公文書館蔵）

これまで、「東京大学百年史」の口絵や「学内広報」の表紙で紹介してきた、東京大学創設の布達は、「文部省見送」の中に収められている原本の写しであった。

法規分類大典の中に、東京大学創設の布達は輪郭つきであると書かれていたが、今回新たにその輪郭つきの布達を見付けることができた。
東大史料余滴（4）

初代東大総理・加藤弘之日記に現れる有感地震記事

都司嘉宣

今年9月24日付けの「学内広報」899号の表紙に初代総理であった加藤弘之の日記が掲載され、慶応3年（1867）から大正5年（1916）までの日記があると紹介されて、毎日の天候などが記されているという説明があった。この記事を読んでわたしは、そこに有感地震の記事が記されていないかということが頭をかすめた。ここですごし、明治期の地震研究について述べておこう。

わが国で近代的な学術研究の意味で組織的に地震観測が行われるようになるのは、明治18年（1885）、英国から来日した政府御用教師ユーニングの助言により、東大の初代の地震学教授であった関谷清清が、全国の測候所に地震の報告を依頼したことに始まる。このころ全国各地の測候所・郡役所での地震観測は、まだ器具計測ではなく人間の体感によるもので、微震、弱震、強震、烈震の4段階の震度階もこのときに創案された。

これよりきき、明治13年（1880）2月22日の横浜を襲った、やや強い地震を契機として、上述のユーニングによって水平振子を使った世界最初の実用的な地震計が東京で創られ、測定器具による地震観測が始められた。器具観測による地震観測点は、明治18年には、東京のほか、水戸、前橋の２点を加えた。その後観測点数は毎年2、3点ずつ新設されていったが、明治24年（1891）の濃尾地震（マグニチュード8.0）以後、急速に地震の器具観測点が増加した。

このようにしてから、明治20年ごろ、近代的な観測の時代にいったことができる。それ以前の時代に起きた地震の研究は、各時代に書かれた種々多様な古文書記録を調べる以外方法がないのである。被害を伴った地震であれば過去者側、民衆側ともさまざまな記録がなされる。しかし、被害には至らなかった有感地震は、日記中での記事以外、ほとんど記録が残ることがない。逆に言えば、古い時代の日記は、地震計の役目を果たしてくれるのである。現われわれの研究室では江戸から明治の初頭にかけての約300年間に書かれた全国に残る日記を調査している。江戸初期以来現在まで400年間の、日本列島で感じられたすべての有感地震を登録できるまでにはいまますかの年月が必要であろう。

「加藤弘之日記」に現れる最も古い有感地震の記載は、慶応3年5月21日の「噂、学校、今晩地震ありし。余不知（しらず）」の記事である。彼の就寝中の地震であったのだろうか。気を付いた家人に教えられたようである。この地震は、同じ江戸に住んでいた斎藤月岑と小栗上野介、それに千葉県香取町干潟の平山家所蔵の「万党帳」、宇都宮市三番町の青木家文書に記載されている。月岑の日記には「少し強し」とあるので江戸での震度は3、千葉県香取町、および宇都宮で震度２か。今のところこれだけしかわからない。東京付近の地下に生じた小地震であろう。この地震の2日後、23日に「午後地震あり」とあって、これが加藤日記に現れる2番目の地震である。この地震はかなり大きく、北は青森県雫ケ沢、八戸、盛岡、西は加賀国まで及んでいる。雫ケ沢で「強く長く近年覚えぬ」とかかれ、江戸でも「金沢丹後日記」に「大地震」とある。このように広域で強く感じられた地震でありながら被害を生じた場所はない。規模（マグニチュード）の大きさ、しかも震源の深い地震であったのであろう。慶応3年には、10月11日、11月6日、11月11日にも地震があり、結局この年5度は地震を記録していることになる。

同じような有感地震記事が、明治期にも現れる。すなわち明治3年に3回、明治6年に3回、明治7年に2回、明治9年に1回、と
いうように。上述の明治13年2月22日の横浜
に被害を生じた地震の日には、「午前1時5分
前地震大なり、七十五度ナルヨシ」とあって、
この日は東京では本震の大揺れの後、75回も
の有感地震が感じられた。
残念なことに、日記は継続して書かれたわ
けでもない。例えば明治元年3月、4月分は、
「繁忙につき」日記をつけられなかった、と彼
自身記している。明治4年、5年分は欠本し
ている。最初から書かれなかったのか、時の
流れの中に失われたものか分からない。明
治11年は6月7日以後はぶつんと記事がない。
空白頁が続いて巻末に至るのである。同様に
年初は書かれ、年末は記事を欠いている年が
しばしば見られる。恐れながら「総理先生の
三日坊主」と御推測申し…いやいや、そうで
はありません。前後年の記事を察するために政府
高官、外国人御雇教師の接待と、本業の激務
のさまがうかがわれ、きっと不本意ながら日
記などつけてる時間も奪われたのであります。
御苦労おいたわしく御同情申し上げ
ます。
そしてさらに、加藤先生には、明治24年
（1891）10月24日の早朝、彼阜愛知地方をお
そった潰尾地震（M8.0）の大震の後発足し
た、文部省所管の「震災予防調査会」の初代
の会長を勤められ、初期の地震学の発展に大
きな貢献を頂いたことを、遙か後生の末席に
つななる私をまた深く感謝するところなので
あります。（地震研究所助教授）
東大の記録管理（3）

達（たっし）

承 前

前回、明治19年（1886）に帝国大学が誕生してしばらくの内に達のシステムがほぼ完成し、その第1の点として番号が付けられるようにになった点を紹介した。前回は触れなかったが、この番号は当初朱記されていた場合もある。また公文書類「検印録」を見て行くと、明治33年（1900）からそれはまで「第十号」「第拾号」など書かれていたところを、概ね「第〇号」とする書き方に変わっている（文例11、12参照）。

第2の点は、達という名が生まれた所以の「相達候事」という部分が原則としてなくなり、候文が改められ、例外はあるにもしても前回の文例4や今回の文例5のように片仮名混じりの漢文訓読調の文語体となったことである。文例5では「右相達斯」という部分があるが、普通は「相定」あるいは「相定ノ」というような言い切りの形となった。

文体の変化は、太政官制度が内閣制度にかわる際に、明治18年12月22日（1885）から太政官の達の文言から「相達候事」という候文の部分がなくなり、それが内閣制度の誕生とともに急速に各官衙が過ごしたと対応している。従って、本学のみのことでなく、近代的行政制度の形成の一環に位置づけられる。

第3に、明治21年（1888）から、個別部局宛ての達が「大学一般」などに宛てたものと分けられ、『分達』（ぶんたつと読むのだろうか）とされ、別立ての番号が付されるようになった（文例6、7）。当初は個別部局宛ての文例7のような達のみ「分達」とされ、文例8と9のような「助手書記宛てや『分科大学』宛がただし」は「達」とされていたが、明治31年11月からは「大学一般」宛てのみ「達」とされ、文例10〜12のようにそれ以外宛ては全て「分達」とされるようになっている。

このように、帝国大学成立に伴って、達は急速にその形態を整えたが、実は多少の例外も認められる。文例13は宛名のない達である。これは文書だけでなく入札書の段階から宛名がなく、本来「大学一般」とあるべきところを書き漏らした可能性が高い。また、前回、明治19年から総長名の達には番号が付されるようになったが、何か「分達付きで総長名のない例外として総長の交代を告示する達がある。文例14は、明治30年11月12日（1897）に外山正一が総長に任ぜられた時でも、決裁は外山自身がしているが、東京帝国大学の名で達している。総長自身が担任総長を達するのは位置が合わないと考えたのである。

そして、以上を見てくると、達は、規制内容や命令、告示などを伝える所謂「公布式」の機能を果たしていたことがわかる。当時の達の内容は非常に幅広く多岐に渡っており、規制の制定改廃だけでなく、総長の交代、儀式の施行、さらには防火の注意（文例15）にまで及んでいる。それらを学内の必要なところに伝えるのが達であったわけである。

しかし、総長名で文面上に「相達」すなわち達することは、文書名に総長が規制を規定するということでもあった。明治27年10月（1894）の分科大学学則中の入学在学学則の改正の際、その進行過程のいつも本学が改正日と捉えていたかから知ることができる。
① 評議員会定日 9月25日
② 文部大臣宛改正同  起案日 9月27日
③ 同  同  起案文面に附日付（空欄）
④ 同  同  起案文面に附日付（空欄）
⑥ 同文部大臣宛改正同 起案日 9月27日
⑦ 同  書面  起案文面に附日付（空欄）
⑧「大学一般」宛  9月29日
⑨ 同  達  9月29日
⑩ 同  達  9月29日
⑪ 同  達  9月29日
以上のうち改正日とならなかったものの、①と⑥と⑪である。しかし、今日なら①の評議員会可決の日を学部通則（当時の分科大学通則
に相当）の改正日と考えるわけだが、当時はそうではなかった。現在は通常、評議員会可決後に文部大臣に報告すればよいだろうが、当
時は評議員会可決後に文部大臣の認可が必要で、認可が得られなければ廃案となったのである。

すたと文部大臣の認可日①が改正日となりそうだが、当時の記録を見るとそれも違う。当時文部大臣に提出していた「帝国大学
年報」の明治27年分は、改正日を10月27日と記録しているからである。①以下が10月27日だが、通常①は実際に発送した日付で（文例
13は例外）、達文面の日付①と異なる場合もあり、①が改正日というわけではない。

このことは、文部大臣が認可してもなお総

 AOL タブ

 証  これの問題については近い将来「東京大学史紀要」で証じることを計画している。

 資料  ②～⑪の資料は、當年の「文部大臣准

 入」27～31丁、同「検印録」61～64丁

 -----
沿革史料紹介（3）
—海外留学関係史料について—

今回紹介するのは1880年代から1910年代までの東京大学における海外留学生にかかわる史料である。それらの簿冊名と時期は以下のとおりである。
文部省派遣海外留学生関係書類　明治16年
海外留学生関係書類　明治17・18年
留学生関係書類　明治19～24年
留学生関係書類　明治25～28年
留学生関係書類　明治29～31年
留学生関係　明治32～37年
留学生関係書類　明治38～43年

百年史編集当時に調査し作成された事務局庶務部資料の目録をと外国関係文書（記号G）に分類されており、それら全て75簿冊中の一部である。簿冊の表題は「文部省送別」「文部大臣別名」と同様に黒表紙である。簿冊の構成は第1冊を除き目録と本文（資料）からなり、編纂は年代別に上から綴られている。しかし、明治16年の簿冊には目録がなく、明治38～43年の簿冊は「海外留学関係簿」、「留学期間延長及び学術留学地追加等関係簿」というように事項別になっている。収録されている件名（目的の件名）は全部で464件にのぼる。内容はたとえば「明治十七年官費留学生四人派遣ニ付学科年限等取扱並人物選択ノ件」の如く、留学生の人選、学科、修業場所などから、留学生からの転校（学）顛、留学延期顕、諸問題派遣顕、学費増額顕等々、さらには留学先での学位試験費用の下付顕など、興味深い史料が豊富である。もちろん、それら以外に留学に関する文部省からの通知書も収められている。明治16年、17年、18年の分には、明治15年2月に制定された官費海外留学生規則中の第二項第四項（毎年一月七月ニ同＝第四号書式【修業場所・受持教席・修業課目・受業料・旅行などからなる一注】ノ申報書ヲ文部省ニ送達スベシ）による申報書が（文部省から回覧された写しと思われる）綴じられており、極めて一部分ではあるが詳細な留学状況が判る。明治16年の収められている申報書の人物は、九里龍作、和田垣謙二、小勝文次郎、難波正、飯島助、三浦守治、緒方正規、小金井良精の8名である。このほか活版印刷の史料としては、明治15年以降の文部省海外留学生表（題名及び発行主体は時期により異なる）がある。その年を摘記すれば、明治15～16、19～22、24～31、38～39、41～43年である。

具体的な人物でどのような史料が残されているのか見てみよう。井上哲次郎を取り上げる。彼は明治16年度の留学生で哲学専攻、留学先は独国、帰国は明治23年である。井上にかかわる下の史料（件名）は以下のとおりである。
明治17年　前件（17年度派遣留学生）＝付井上哲次郎ノス学都市六ヵ月選択ノ件/井上哲次郎非職被命候上其留学被命度察覧/明治18年
在独留学生井上哲次郎ヨリ留学延期願出ノ件及聽許指令/明治19年　独逸国留学生井上哲次郎審美学修業ノ付旅費支給額不良可ノ件/同人仏国カール大学ニ入校ノ件/明治21年　独逸国留学生井上哲次郎ヨリ教育上ノ報書報告ノ件などである。ところで、哲学専攻の留学生派遣事例があり（明治16年7月付、専門学務局長宛、多藤弘之総理発）、以下に紹介しておこう。（△ 内は削除）

哲学ハ已ニ本学文学部ノ専門学科ヲ置キ哲学士ヲ養成シ新設外國教員ト交際センメサルヘカラス而シテ該当ノ如キ若シ小成ヲ以テ足リテスルフハ強（故）テ海外留学ヲ要セラレモ他日我大学ヲ教授タルヘキ者ヲ養成センニ決シテ小成ヲ以テ安南ヘカラサル事ヲ略論ナレキ必スヨリ欧スニ到リ得し学術追求ニ就テアリ其真語性ヲ研究センメサルヘカラス加リ本邦現今大学ヲ求メざリ過激暴雑ノ空理ヲ唱テ世ノ少年子弟ノ誤入ラ止ムルカ如キハ必竟深ク真理ヲ講究スル真語性ヲ未タ起サルヲ職ニ於スルノナル事務スノ必然ナレキハ益以テ真語性ヲ一日ノ怠ルヘカラス知ルヘスレミニ哲学専修ノ者＝名ヲ留学センメサルヘカラスヲナリ故ニ卒業帰朝ノ上ハ本学教員ヲ充テヲ求スラ＝ノ教導ニ従ニ真語性ヲ講しテノ学術ヲ講義ラウラララスルナル（明治16年留学生書類中）ちなみに、幹事の服部は「哲学専修ノモノヲ派遣スルハ大不同意」と記していた。

（立教大学　中野　実）
受贈図書一覧（平成2年6月～平成3年5月）

東京大学生産技術研究所年次要覧 第38号
同研所

埼玉県行政文書件名目録
県編1～2
埼玉県教育委員会

埼玉県行政文書件名目録
県編2～3
埼玉県教育委員会

文書館紀要 第4号
埼玉県立文書館

黒船来航・村々への情報と影響
第15回収蔵文書展
埼玉県立文書館

THE UNIVERSITY OF TOKYO CATALOGUE FOR 1989-90
東京大学

近代日本研究 第6巻
慶應義塾福沢研究センター

名古屋大学の歩み
同大学

‘91東京大学就職案内
東京学生〈進路資料室〉

関西大学年史記要 第7・8合併号
特集 学園紛争の記録
同大学

環境安全センター要覧
同センター

中央大学百年史編集ニュース 第14号
同大学

社会科学紀要 第39号
教育学部社会科学科

名古屋大学一覧 昭和63年度 平成元年度
同大学

神奈川大学評論 第8号
同大学

野間教育研究所所蔵 學校沿革史誌目録
[1989年度増加図書]
同研究所

沼津市博物館館記要14
沼津市歴史民俗資料館

沼津市明治史料館史料目録2
沼津市明治史料館

沼津市明治史料館史料目録3
上石田区有文書目録

沼津市明治史料館
沼津市明治史料館史料目録4
東濃区有文書目録

沼津市明治史料館
沼津市明治史料館史料目録5
東濃区有文書目録

沼津市明治史料館
沼津市明治史料館

北の丸（国立公文書館報） 第22号
国立公文書館
国立公文書館年報 第19号
国立公文書館

堀見未子土木技師―台湾土木の労働者―
向山寛夫

東京大学職員名簿 平成2年
同資料館

横浜開港資料館記要 第8号
同資料館

「昌平学」物語―幕末の書生寮とその寮生―
斯文会 昭和61年10月

風盛堂と江戸時代
斯文会

YOKOHAMA PAST AND PRESENT
横浜市立大学 平成2年 3月

YOKOHAMA PAST AND PRESENT
（日本語補助版）
横浜市立大学

群馬県立文書館年報 平成元年度版
同文書館 平成2年6月

双文 第1号
群馬県立文書館 昭和59年3月

双文 第2号
群馬県立文書館 昭和60年2月

双文 第3号
群馬県立文書館 昭和61年3月

双文 第4号
群馬県立文書館 昭和62年3月

双文 第5号
群馬県立文書館 昭和63年3月

双文 第6号
群馬県立文書館 平成元年3月
2.5 火 第22回東京大学史料の保存に関する委員会開催。

2.21 木 国際基督教大学より学生20名参考のため来室見学。

2.22 金 京都大学百年史編纂委員会より百年史編纂参考のため1名来室見学。

3.5 火 京都大学百年史編纂委員会より百年史編纂参考のため1名来室見学。

3.6 水 大久保利謙氏より床次竹次郎書簡を受け入れ。

3.11 月 京都大学百年史編纂委員会より百年史編纂参考のため1名来室見学。

3.27 水 神戸大学百年史編纂室より百年史編纂参考のため2名来室見学。

3.29 金 「東京大学史紀要」第9号発行。

3.29 金 「東京大学史料室ニュース」第6号発行。

4.5 金 大講堂1階入り口に「東京大学史料室」の看板をかける。

4.8 月 日本テレビ、テレビ放映用のため史料撮影。

5.14 火 第23回東京大学史料の保存に関す